
花街恋々物語集

神希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花街恋々物語集

【コード】

N1911T

【作者名】

神希

【あらすじ】

江戸時代。花街の人間たちのオムニバス形式の愛の話

桜色の幸福（前書き）

花街で一二を争う花魁である十六夜、そしてその馴染みである武家の男佐之助の話。

私は専門家ではございませんので文章中の描写に不確かな情報が入り交っております。あくまでもファンタジーな江戸時代として楽しんでいただけたら幸いです。

桜色の幸福

常世が蜂蜜のような黄昏色に染まる頃、この街はむくりむくりと眼を醒ます。黄昏色がゆつくりと夜闇色に侵食されていく世界は行灯に、提灯に、灯籠に淡く色づく光色のコントラストがふわりと映える。

門番は眠たそうに門に寄りかかり、禿かむろがちよこりちよこりと部屋に引っ込めば、ここはもう天下の花街。羨望と情の渦巻く色のなかだ。

そのなかで、どの店にも目もくれず真っ直ぐと歩みを続ける男がひとり。茶筌鬘と三白眼の特徴的な男だ。男は花街一番の店に入ると口角を吊り上げた。絢爛豪華な装飾ときらきらしい光の海は男の心を撥る。馴染みとなった今では、すんなりと座敷へ通される。うすらぼんやりとしたそこでは、美しい花魁が待っていた。

「十六夜」

暗い栗色の髪を結び、桜色の美しい重ねを身に纏った花魁は嬉しそうに微笑を浮かべ振り返った。

「佐之助様…。お元気そうぞ何より、会えぬこの間、あちきは一日千秋の思いでありんした」

椿の香油と彼女自身の色香に佐之助の頭はくらくらするようであった。初めから花魁の彼女が自分にとって特別な存在であったかと問われればそうとは言いがたいが。なんせ当時の彼女はまだ禿から振袖新造になつたばかりであり、一番の花魁の禿であつたらしい彼女の噂を聞いたのは、この花街から離れた場所にある陰間茶屋だっ

たからだ。

「憶えてありんすか？あちきと佐之助様が逢ったあの日のこと」
「ああ、憶えているともさ。ここから逃げ出そうとしていたのだったな」

今でも鮮明に思い出す。脆くなった壁を必死でよじ登ろうとしていたのを視界の端に捉えたのだった。長い髪の毛を切ったあとらしくざんばらになった髪の毛を鬚のように結び上げ男物の着物を着ていた。

『なにをしているんだ』

『お侍様：お見逃しくください。ここから逃げ出したいのです』

今思い起こせばあれば一目惚れだったろう。当初はそんなこと考えもしなかったが放って置けなかった。

『駄目だ、なぜ逃げようとする？』

『嫌なのでございます。誰ともわからぬ方々の相手をする日々など』

『！』
『……………振袖か？留袖か？』

『……………振袖』

『ならば尚更であろう。お前は花魁になれるだろうに』

『花魁になろうともいわずれは梅の毒で死ぬことくらい分かっております。お侍様、無理は承知。私をつれて外の世界に連れて行って欲しいのです』

彼女はとても辛そうな表情をして声を振り絞った。死にたくない、死にたくない、と。

「あの時は強情でこまったもんだ」

「でもあの時、佐之助様に逢えたからあちきはここまで来れたのでありんすよ？」

気弱で死の陰に怯えていた少女はもう居らず、そこには堂々とした一人の夜の蝶が、花魁が居た。その生娘のように幼く無垢な顔に朱を刺し、どんなものでも平伏させることの出来る一流の花魁が。

「…だがな、十六夜。俺はお前に話さなければならぬことがある」

佐之助は煙管を取り出し火を付けると、濁った煙を吐いた。十六夜は知っている、彼のこの行為は自らが何らかの理由で気持ちを落ち着かせるときの癖であるということ。

「………なんでありんすか？」

「もうここには来ない。十六夜、きつとお前と会うのはもう最後だろっ」

その言葉を聞くと、白い肌に映える紅色の唇がふるふると震え、佐之助の小さな溜め息と同時に一本目の線香の火が消えた。

「………十六夜、さらばだ」

「佐之助様、最後に口を吸っていただきあります」

もう二度と会えなくなる日が来るくらい、分かっていたらう。花魁の自分が、ここまで心狂わせられる存在はきつと彼だけだというのに。彼はきつと妻を娶るのだらう、娶ってもおかしくない齡だ。ずくりと痛む胸を誤魔化しながら、十六夜は佐之助の唇を求めた。

「…ああ」

求められるがままに佐之助は十六夜の紅い唇に自らの唇を重ねた。

「お達者で」

薄暗い部屋のなか、十六夜は遠退く背中にぽつりと呟く。そしてその言の葉も金平糖を散った空に溶け込んだ。

ある秋の初めの頃である。あの日から何度日が沈み、月が顔を出したろうか。佐之助は言ったように、一度も会っていない。

「十六夜ちゃん？浮かない顔をしておるね」

佐之助に会う前から気に掛けて貰っていた馴染みの男が、手に持った万華鏡を覗きながら呟いた。

「いえ、何ともないでありんすよ？」

「嘘。浮かない顔してるよ」

どうやらこの男には嘘が通じないのか、はたまたそこまで漏れ出していたのだろうか。

「私なら君にこんな顔させたりしないのに、ね。十六夜ちゃん…身請けの話、考えておいてくれるかな？」

「齊賀さま…」

齊賀はにこりと笑みながら身請け話をちらつかせると二本目の線香が消えたことを確認し、部屋を出ていった。彼が出ていったあと十六夜の禿であるお鶴がいそいそと現れた。

「十六夜姉さん、斉賀さまのところに行ってしまったのですか？」

不安げな色を含んだお鶴の漆黒の瞳はふるふると揺れる。

「お鶴、あちはどこにも行きやしないでありんすから。そんな不安そうな顔をしない」

「でもっ……」

「お前は次の春が来る頃にはもう振袖新造になるんでありんすよ？」

自分の持たぬその柔らかな黒髪をさらさらと指で鋤けば、頬を優しく撫でた。

季節は目まぐるしく変わる。つい最近までひぐらしが鳴き、黄金色の海が唸る季節には蜻蛉が飛んでいたと思っていたのだが、紅く色付いたもみじたちはいつの間にか散り、寒々とした冬にはしんと音を吸う雪が降った。今では桜の蕾が顔を見せ始めている。まだまだ幼い顔立ちのお鶴は禿から振袖新造になった。新しいことばかりだ。

「もうそろそろ……一年に……」

佐之助と会わなくなっからもう一年が経とうとしていた。あれからも斉賀はここに訪れて来たし、そのたびにお鶴はそうつと物陰から此方を覗き見ていた。

「それにしても今日は騒がしいでありんすね」

「そうですね、なにかお祭りでもあるんでしょうか？」

座敷の外、きつと店の外でもあろう場所から騒がしさの元は音を発していた。祭りのような、だがしかしそれにしては静かすぎる。

喧騒も聞こえない。聞こえるのは足音と金属の擦れる音、人々の話し声だ。

「十六夜」

障子の向こうから聞こえた男の声に十六夜は腰を浮かす。

「旦那様、なんでありんすか？」

昼間からこの店の主に呼ばれることなど最近ではなかった為、一体なんだと十六夜は怪訝な表情を浮かべる。

「お前、今まで何度か身請けの話が来ていただろう」

「ええ…。ですが旦那様、あちきは何処ぞへ行く気などありやしません」

そうきっぱりと言い放てば、主はあーだとかうーだとか母音を困ったように伸ばした。

「その客が十六夜に会わん限り梃子でも動かんと言ってな。顔だけでも見せてやってくれ」

なんて客だろう。ここ一番の店の主すらこうしてしまふ客だ、どこまで癖のある者なのか。

「わかりました」

その面をしっかりと拝んでやろうと十六夜は赤い紅に彩られた唇をにいと吊り上げた。客が来ると聞いたお鶴は転がしていた鞆を持ち奥へと消えていく。

それから四半刻ほど経つたろう。よく聞いていたものに近い足音が近付いて来た。

「…………！」

十六夜はただただ呆然とした。

「久しいな、十六夜」

どれほど彼に焦がれていたか！会えぬと言って一年ほどの日々が経つたこんな日にいきなり現れるだなんて！

「佐之助…様…………？」

ゆっくり、だが一瞬のように感じられるなか障子が開けられた。逆光のなかでも懐かしい彼の顔は笑んでいることが分かり、嬉しさと同時に沸々と怒りが込み上げてきた。

「佐之助様、あなたは馴染みでありんすよね？こんなにも回りくどい会い方があるんすか？」

「すまんすまん、だが逢えるかはわからなかった」

困ったように眉尻を下げ佐之助はどかりと床に座り込む。

「親爺と話してさ、見合いも蹴った。十六夜、お前を迎えに来たんだ」

「…………は…………」

迎えに来る。だなんて、佐之助は見合いも蹴ったのか。どこか呆れすら出てくるような行動だ。

「最初は凄い反対された、遊女を妻にするなんて。………だが、俺はお前じゃないといけならしい…、十六夜。お前さえ良ければ妻になつて一生を共にしてくれ」

一生彼の口からそのような言葉を聞くだなんて思っていなかった。答なんて決まつている。

「……………ええ、佐之助様…！」

十六夜の胸はこの一年の空白を一気に埋めるような感覚にぼろぼろと大粒の涙を流した。

泰平の世の、鳥籠のような花街での出来事でした。それはそれは美しい千鳥の花魁がある日、外の世界の男に恋をしました。外の世界の男もまた千鳥に恋をしました。

千鳥は鳥籠の外よりも男に心の臓を掴まれたようになりました。男は千鳥にあるはずもない羽根を抜かれました。

桜吹雪の春から一年千歳再び桜が芽吹こうとした日に千鳥は自由と愛する人を得ました。

幼い頃から過ごしたこの花街から出る日がやって来た。店から三枚歯下駄を履き周りに人を付けながら十六夜はこの数年間を懐かしむように思い出していった。そして大きな大きな出入りの赤い門、そこを守る門番を横目で見ながら三枚歯下駄から普通の下駄に履き替えた。

(お鶴、すまない。何処にも行かないと言ったのにあちきはお前を置いていくのでありんすよ。千尋、あちきはお前とは違う形だけれど幸せになりもつす)

「佐之助様、改めましてよろしくお願いするでありんすよ」

籠に入る前に笑みながら佐之助にそう言つと佐之助もにかりと笑みながら答えた。

「ああ、これからもよろしく頼む」

桜吹雪の美しい、春の日だった。

桜色の幸福（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

この作品を軸にしてたくさんのお話を書いていけたらいいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1911t/>

花街恋々物語集

2011年7月20日11時01分発行